

亡友月照十七回忌辰の作

西郷南洲

相約あひやくして淵ふち投とうず後こう先せん無なし  
 頭こゝろづめも回めぐらせば十じゅう有ゆう余よ年ねんの夢ゆめ  
 豈あに凶はからんや波は上じょう再さい生せいの縁えん  
 空まなしく幽ゆう明めい隔へだてて墓ぼ前ぜんに哭なくす

【作者】西郷隆盛（一八二七〜一八七七年）（文政一〇年〜明治一〇年）明治維新の元勳。政治家。号して南洲。通称は吉之助。薩摩の人。討幕の指導者として薩長同盟を結び、戊辰戦争を遂行し、維新の三傑の一人と称された。新政府の参議・陸軍大将となったが、西南戦争を起し、城山で自刃した。

【語釈】\*亡友：死んだ友人。なき友。 \*月照：幕末の尊攘派の僧。 \*辰：時（とき）。 \*豈凶：全く思いがけないことが起こったを表す。意外にも。 \*再生：錦江湾に入水したが、隆盛は助かったことを謂う。 \*回頭：ふりむく。頭をめぐらす。

【通釈】◎なき友である月照の十七回忌の時の作。 \*共に入水自殺を謀ったものの、自分一人生きながらえたことについての心境を詠った詩。約束しあつてふちに身を投じたのは、先に（死ぬ）・後になって（死ぬ）ということではなかったが。（わたし〓西郷隆盛は）全く思いもかけずに、波の上で生き返ったことによる。（爾来）十餘年の人生をふり返れば、むなしく冥土と現世とにわかれて、（わたしは月照の）墓前で（月照を悼んで）声をあげて泣いた。

【備考】◎月照：幕末の尊攘派の僧。文化十年（1813年）〜安政五年（1858年）京都清水寺成就院の住職。大坂町医の玉井鼎齋宗江の子。ペリー来航後の国情に、住職を弟信海に譲り、国事に奔走。梅田雲浜・頼三樹三郎と結んで活躍。安政の大獄の危険を逃れ、西郷隆盛と京都を脱出、後に、平野国臣に伴われて薩摩に行ったが、藩に入れられず、十一月十五日、西郷隆盛とともに錦江湾に入水。隆盛は助けられ、月照は死亡。この間の薩摩藩当局は、幕府側の追及を恐れ、月照らを日向国へ追放し、途上で切り捨てることに決定していた。こういう状況の下で、二人は入水を決意し実行したものの、西郷隆盛は救助されて蘇生し、月照は死亡した。藩当局は二人を死んだものとして扱い、二人の墓も作られ、糾明する幕府側に対処した。二人の入水から一人だけ生き残った西郷隆盛、彼の置かれた複雑な心境をこの詩で詠いあげた。